

「栄二譜」試論

星野厚子

はじめに

「栄二譜」とは、長唄三味線方の杵屋栄二（本名・藤間吉太郎、生没年1894－1979）が著した楽譜である。

栄二は、7世坂東三津五郎や6世中村歌右衛門など、多くの著名な歌舞伎役者の出囃子や陰囃子を担当した、歌舞伎に携わる演奏家として活躍しただけでなく、埋もれた曲を収集・研究し、それらの曲を譜に起こして刊行したことで知られている。



杵屋栄二

「栄二譜」にはいくつか種類がある。そのうちの『栄二・三絃譜』は、栄二の『現代邦楽名鑑』より人間国宝認定とも重なる時期に、数回の改訂を経て刊行された集大成ともいえる譜本である。しかし、現在刊行されている他の長唄譜に比べ、知名度が高いとはいえない。また、「栄二譜」は数種類存在するため、採譜曲目の全体像がわかりにくい状況にある。本稿では『栄二・三絃譜』以前に刊行された譜本も含め、「栄二譜」の全体像を把握し、栄二の長唄研究の功績に迫りたい。

幸いにも東京文化財研究所無形文化遺産部（以下、東文研）の書庫に、「栄二譜」のうちの『杵屋栄二蔵古本』、『杵屋栄二譜本』、『栄二譜本』が保管されていたことも、本報告を行うきっかけとなったことを付記しておく。なお、本文中の物故者の敬称は引用文以外全て略した。

1. 杵屋栄二の足跡

栄二は明治27（1894）年、東京日本橋に生まれた。祖父は清元節三味線方の初世清元梅吉（清元寿兵衛）、父も清元節三味線方の清元栄吉（のちに太兵衛）という、清元節の家系であった。明治42（1909）年末から母より長唄の手ほどきを受け、父が親交のあった永井素岳¹⁾の勧めで、明治44年4月、18歳で杵屋派家元である3世杵屋栄蔵²⁾に入門した。明治45年1月、新富座（東京）で歌舞伎の初舞台を踏む。初名「栄次」を経て、「栄次郎」の名で出演した。大正2（1913）年、「栄二」と改名し、大正10年10月、タテ三味線へ昇進した。この頃から、自分の習得した曲目を、譜に書き留めるようになった³⁾。昭和12（1937）年8月、中村吉右衛門劇団邦楽部長を3世栄蔵より引き継ぎ、歌舞伎音楽演奏家として活躍する。さらに、山田抄太郎⁴⁾の推薦により、昭和26（1951）年から昭和38年まで東京藝術大学にて下座音楽の講義・実技指導を受け持つ。作曲活動も精力的に行い、数多くの新作を発表したが、そのうちの《楊貴妃》は作曲と演奏が評価され、昭和30年度第10回文化庁芸術祭にお

いて、芸術祭奨励賞を受賞した。さらに、古典曲の採譜と長唄《風流相生獅子》の演奏により昭和34年度芸術選奨を受賞、昭和39年には重要無形文化財（各個認定）保持者（人間国宝）に認定された。また、同年10月に紫綬褒章、昭和42年に勲四等瑞宝章、昭和50年に勲三等瑞宝章を授与されている。

2. 「栄二譜」の概要

（1）邦楽譜の普及

口頭伝承を基本としている邦楽において、出版物など何らかの方法によって詞章（歌詞）は伝えられても、演奏されなければ音の伝承が途絶えてしまうのは、その性質上、当然のことである。たとえば長唄は、18世紀前後（宝永～正徳年間頃）から歌舞伎所作事とともに隆盛した三味線音楽で、歌舞伎の初演のうちに出版された、長唄正本が数多く現存していることなどにより、初演時の詞章を確認することは出来る。しかし、音の再現は容易ではない。このような背景から、明治時代になると、邦楽調査掛⁵⁾に代表されるとおり、邦楽が西洋音楽に倣って記譜されるようになり、長唄においても様々な楽譜が考案された。

主な長唄譜には、勘所譜⁶⁾の『三味線文化譜』（4世杵家弥七編。以下「文化譜」）、相対音高譜⁷⁾の『長唄新稽古本』（吉住小十郎編。以下「小十郎譜」）、『長唄研究稽古本』（杵屋弥之介編。以下「青柳譜⁸⁾」）などがある。

（2）栄二と採譜

最初期の「栄二譜」である『三絃譜附長唄稽古本』には、栄二の採譜の目的が述べられた以下の「序」がある。

習ひ覚へた一曲を一手も崩さず、又忘れずに居るのはなかなかむつかしい事で、まして長唄は他の浄瑠璃等に比べて、一曲の長さが短いので曲数を多く覚へる為、自然に崩れる事も忘れる事も余計になります。

是を防ぐには楽譜に依るより外はないので有りますが、中には楽譜が有ると、夫をあてにしてかへつて忘れると申される方も有ります。然し覚へる時の助けにも、復習にも、また備忘にも、楽譜が必要といふ事は、現在多数の方々が認められて居る事と思ひます。

此三絃譜附稽古本は、杵屋栄蔵師一門の曲の手を揃へる為に始めたもので有りましたが、右の目的にも叶ふ事故、発売したならばといふ栄蔵師のお言葉に従って発行する事に致したもので有ります。

現在のように録音機器が普及していなかった当時、稽古後の教習で頼れるものは自身の手控えであったことが窺える。現在でも、譜の善し悪しは意見の分かれるところであるが、栄二はその両面を考慮した上で、譜本を手がけるようになった。

栄二の採譜曲目には、古典曲のほかに長唄の各流派特有の曲が多く含まれていることも、その特徴といえる。これは、栄二の長唄の教習課程に大きくかかわっており、以下のような言がある。

わたくしはどっちかっていえば手ほどきが遅うございましてね、ま、三味線を達者にひくという
 ことにおいちゃ、ちょっと人の後にさがるもんですから、自分でもあまり他の人のやらぬものを覚
 えようという気があったんでしょね、二十代からそういう曲を覚えたんです。それが積もり積
 もって、のちに重要無形文化財として認定されることにもなるわけですが…（中略）

長唄の流派は多くって、こっちの派でやっても、こっちの派でやらないものがずいぶんあるか
 ら、今でもお互いさまに無いものがあるんですね。それは流通のよくない曲で、知っていても重宝
 しないから、要るときに覚えればいいわっていうもの、わたくしは、それをこっちから一つ、こっ
 ちから一つ、というふうに集めたものですから、自然とそういう曲がわたくしのところに集まった
 わけですよ。（『日本の速記』“人間国宝は語る”〈芸能の部〉昭和46（1971）年）

栄二は3世栄蔵に入門後、古い曲を沢山知っていた栄蔵の母、杵屋六葉満にも教授を受けた。さ
 らに他流派の曲も習得すべく、3世今藤長十郎、今藤綾子など、流派を越えて50人以上に教授を受
 け、その蓄積が採譜に結びついたようである。その中でも、昭和5、6年頃、横浜に住んでいた杵屋
 喜久寿（この時すでに高齢だった女流演奏家）を訪ねて、伝承が途絶えたとされていた《傾城無間の
 鐘⁹⁾》を習ったことは、栄二だけでなく長唄関係者の間で後世に語り継がれる出来事であった¹⁰⁾。栄
 二は《傾城無間の鐘》の習得が大きなきっかけとなって、積極的に古典曲や廃曲の復活を始めたとも
 語っている¹¹⁾。「栄二譜」の最後には、曲の伝承経路（誰から教えを受けたか）が明記してあるものも
 あるが、自身の解釈を加味せず、習った通りのことを忠実に伝承させたいという栄二の姿勢がうかが
 える。

（3）さまざまな「栄二譜」

前述のとおり、栄二は、歌舞伎のタテ三味線をつとめるようになった大正10年頃から採譜を始め
 た。最初期は譜本1冊に1曲を所収する一冊本、その後、1冊に複数曲を所収する合本を刊行してい
 る。同時に、譜本の精度を高める作業を絶えず行い、改訂版も刊行した。

一般に流布したと考えられる「栄二譜」で、現在までに次の7種を確認した¹²⁾。

①『三絃譜附長唄稽古本』	(寸法：22.7×16.2)	
②『栄二三絃譜』	(寸法：25.1×18.0)	
③『長唄三絃譜』	(寸法：23.5×16.2)	
④『杵栄稽古本』	(寸法：28.5×18.3)	
⑤『杵栄譜本』	(寸法：21.8×15.4)	
⑥『栄二譜本』	(寸法：21.8×15.4)	
⑦『栄二・三絃譜』	(寸法：25.8×18.2)	寸法単位：cm

以下に、各譜本についての書誌情報を記す。

なお【表1】では、「栄二譜」の刊行状況を年代順に整理した。

【表1】「栄二譜」刊行一覧

西暦	和暦	年齢	譜本名称	
			合本	一冊本
1926	昭和1	32		
1927	昭和2	33		
1928	昭和3	34		
1929	昭和4	35		
1930	昭和5	36		
1931	昭和6	37		
1932	昭和7	38		
1933	昭和8	39		
1934	昭和9	40		
1935	昭和10	41		
1936	昭和11	42		
1937	昭和12	43		
1938	昭和13	44		
1939	昭和14	45		
1940	昭和15	46		
1941	昭和16	47		
1942	昭和17	48		
1943	昭和18	49		
1944	昭和19	50		
1945	昭和20	51		
1946	昭和21	52		
1947	昭和22	53		
1948	昭和23	54		
1949	昭和24	55		
1950	昭和25	56	②『栄二三絃譜』1・2・3	
1951	昭和26	57		
1952	昭和27	58		
1953	昭和28	59		
1954	昭和29	60		
1955	昭和30	61		
1956	昭和31	62		
1957	昭和32	63		
1958	昭和33	64	③『長唄三絃譜』4・5	
1959	昭和34	65	③『長唄三絃譜』6・7	
1960	昭和35	66		
1961	昭和36	67	③『長唄三絃譜』8	
1962	昭和37	68		
1963	昭和38	69		
1964	昭和39	70		
1965	昭和40	71		
1966	昭和41	72		
1967	昭和42	73	⑦『栄二・三絃譜』9	
1968	昭和43	74		
1969	昭和44	75		
1970	昭和45	76		
1971	昭和46	77	⑦『栄二・三絃譜』1改	
1972	昭和47	78	⑦『栄二・三絃譜』2改・3改	
1973	昭和48	79		
1974	昭和49	80	⑦『栄二・三絃譜』10	
1975	昭和50	81	⑦『栄二・三絃譜』11・4改	
1976	昭和51	82	⑦『栄二・三絃譜』12・5改	
1977	昭和52	83	⑦『栄二・三絃譜』13・6改・14	
1978	昭和53	84		
1979	昭和54	85		

①『三絃譜
長唄稽古本』

④『杵栄
稽古本』

⑤『杵栄
譜本』

⑥『栄二
譜本』

①『三絃譜附長唄稽古本』

刊行期間：昭和4（1929）年～昭和17（1942）年。

形態：一冊本。ただし、短い曲では1冊に2～4曲を所収する合本の形態をとるものもある。和綴じ本。浅黄色・格子模様の表紙。

著者等の表記：題簽に「杵屋栄二編」、刊記に「著作者 杵屋栄二 藤間吉太郎」。

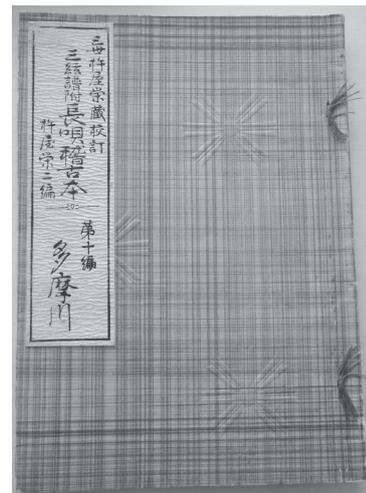
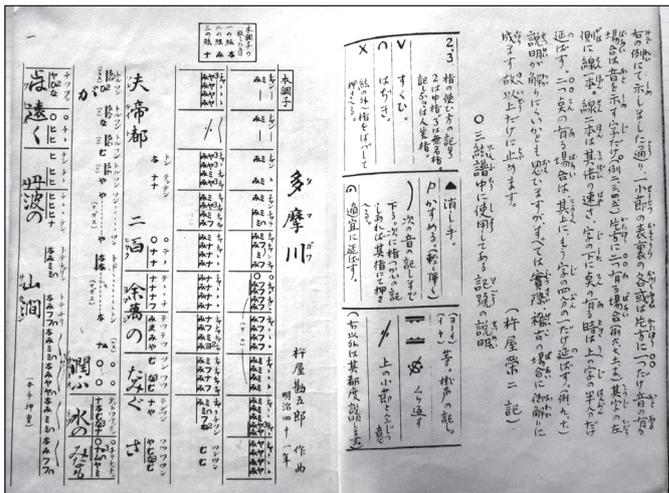
発行者：法木書店³⁾（東京日本橋住吉町廿番地）、関西発売所：福田書店（大阪市南区戎橋通中筋南）。

冊数：既刊目録によると全55冊（現在51冊まで確認）、62曲。

定価：30銭～35銭。1942年3月再版の《吾妻八景》のみ50銭。

採譜曲目：「栄二譜」のうち、この譜本にしかない曲目は10曲。流派を問わず演奏頻度の高い曲目が多く、他の長唄の譜本と同様に、手ほどきの曲から刊行されている。

備考：国立国会図書館に5冊所蔵あり。表紙に「三世杵屋栄蔵校訂」と記載。書名の「三絃譜附」は「長唄稽古本」のあとにつく譜本もある。また、譜の前に「序」・「三絃譜の解説」・「記号の略解」が示された譜本が多く、さらに付録として譜尺¹⁴⁾がついているものもある。第30編以降のほとんどの既刊目録には、一冊本を集成した、合本1～3巻の刊行案内が掲載されている（ただし、合本の所在は不明）。



（個人蔵）

②『栄二三絃譜』（第3巻のみ『栄二・三絃譜』）

刊行期間：昭和25（1950）年。

形態：合本。謄写版。和綴じ本。茶色表紙。

著者等の表記：裏表紙に「杵屋栄二採譜製版」。

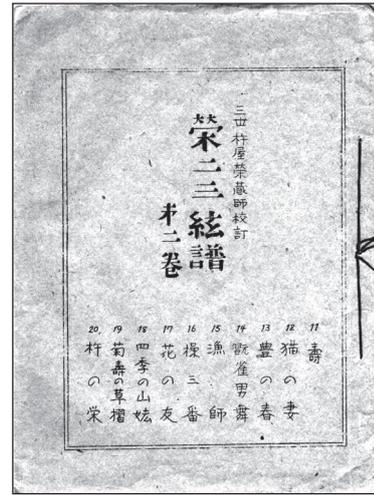
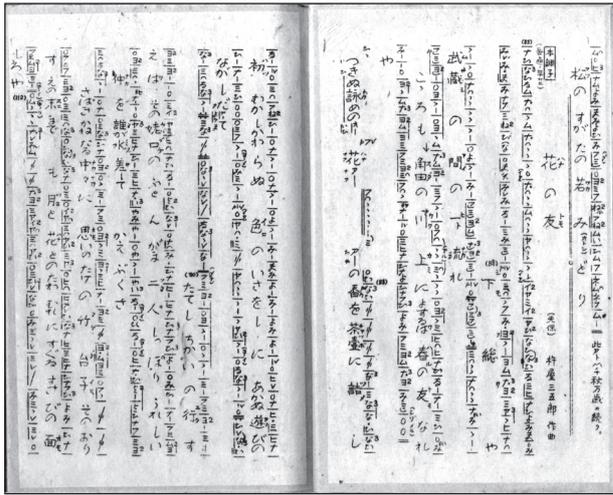
発行者：なし。

冊数：全3巻（第1巻から第3巻）、各巻10曲、計30曲。

定価：なし。私家版。

採譜曲目：これ以降刊行される合本の組み合わせとして固定する。

備考：表紙に「三世杵屋栄蔵師校訂」と記載。第1巻巻末に「序」、「諸記号及省略譜」の解説あり。



(個人蔵)

③『長唄三絃譜』

刊行期間：昭和33（1958）年～昭和36（1961）年。

形態：合本。和綴じ本。やまぶき色・格子模様の表紙。

著者等の表記：刊記に「著作者 杵屋栄二」。

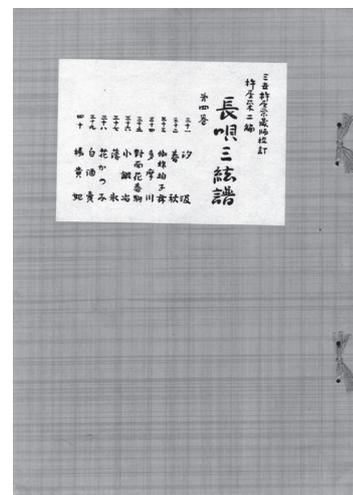
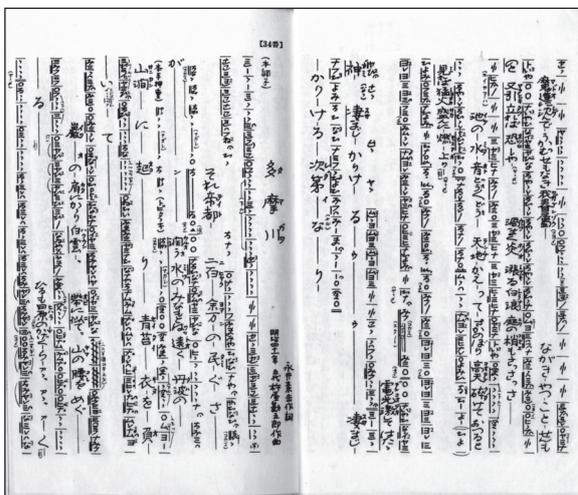
発行者：株式会社邦楽社¹⁵⁾（東京都港区芝西久保桜川町一）。

冊数：全5巻（第4巻～第8巻）、各巻10曲、計50曲。

定価：300円～350円。

採譜曲目：各巻に1曲以上、師匠である3世杵屋栄蔵の作品、あるいは栄二自身の作品を組み合わせるようになった。これ以降刊行される合本の組み合わせとして固定する。「栄二譜」のうち、この譜本にしかない曲目は10曲。

備考：東京文化会館音楽資料室に第4巻から第7巻、国立劇場図書閲覧室（以下、国立劇場）に第5巻の所蔵あり。表紙に「三世杵屋栄蔵師校訂」と記載。巻頭に三絃譜の説明、「諸記号及省略譜」の解説あり。巻末の既刊目次によると、「第一巻より第三巻までは栄二先生個人出版（謄写印刷）で残本はありません」との断りがある。この『長唄三絃譜』の第1巻から第3巻までが見当たらないこと、②が謄写版であることなどに鑑みると、②の後継版という位置づけの合本と推測する。



(個人蔵)

④『杵栄稽古本』

刊行期間：昭和43（1968）年～昭和46（1971）年頃。

形態：一冊本。簡易製本（ホチキス留め）。

著者等の表記：表紙に「杵屋栄二採譜」。

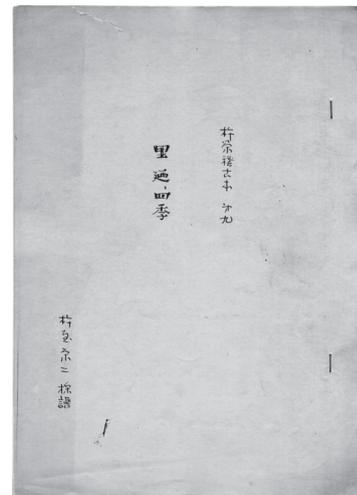
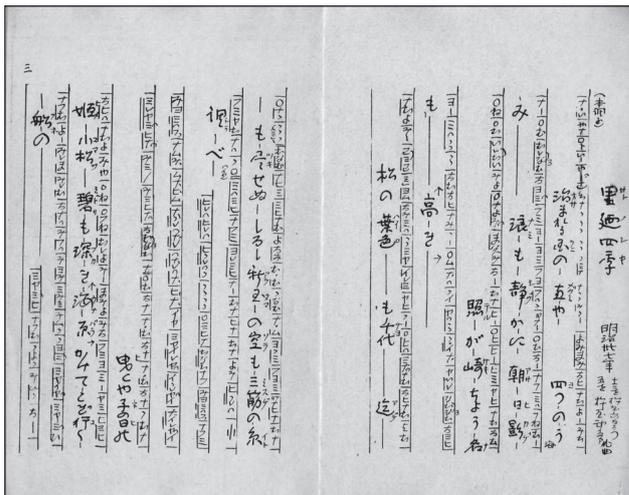
発行者：記載なし。

冊数：全刊行冊数は不明、22冊確認。

定価：なし。私家版。

採譜曲目：「栄二譜」のうち、この譜本にしかない曲目は9曲。

備考：東文研に所蔵あり。製本版「浅田譜」¹⁶⁾の印刷方法と似通う。



(東文研蔵)

⑤『杵栄譜本』

刊行期間：昭和45（1970）年頃～昭和50（1975）年。

形態：一冊本。色画用紙（色は様々）の表紙。簡易製本（ホチキス留め）。

著者等の表記：標題紙に「杵屋栄二採譜」、譜本末尾に「栄二版下」。

発行者：記載なし。

冊数：全刊行冊数は不明、49冊確認。

定価：なし。私家版。

採譜曲目：「栄二譜」のうち、この譜本にしかない曲目は31曲。

備考：東文研、国立劇場に所蔵あり。題簽「杵栄譜本」とある。譜本番号は116までで、117からは『栄二譜本』に移行する。

⑦『栄二・三絃譜』（【表2】参照）

刊行期間：昭和42（1967）年～昭和52（1975）年。

形態：合本。洋装本。橙色表紙。

発行者：第1～3巻、第9～11巻は株式会社邦楽社（東京都港区芝西久保桜川町一）、第4～6巻、第12～14巻は「杵屋栄二」とある。

冊数：第1巻から第6巻、第9巻から第14巻の12巻を確認。各巻10曲、計120曲。

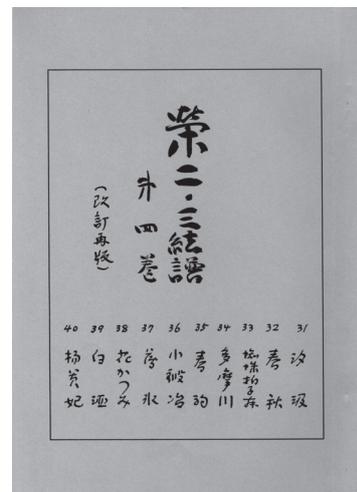
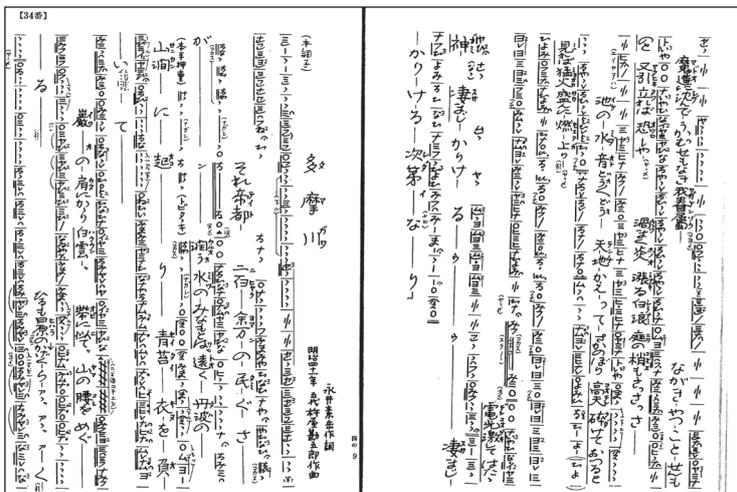
定価：なし。私家版。

採譜曲目：「栄二譜」のうち、この譜本にしかない曲目は32曲。③に引き続き、各巻に1曲以上、3世杵屋栄蔵の作品、あるいは栄二自身の作品を組み合わせている。また、②を基本とする第1巻から第3巻の改訂版を刊行した際にも、あらたに栄蔵の作品あるいは栄二自身の作品を最後に組み合わせるようになったため、結果として②を基本とする合本所収曲が1曲ずつ削られることになったが、削られた曲目は第11巻に収録されている。

備考：【表2】に示した東文研、国立劇場、国立国会図書館以外に、松竹大谷図書館では第1巻から第5巻、第9巻から第14巻の11冊を、また、東京藝術大学音楽学部邦楽研究室では第3巻、第9巻、第10巻の3冊を確認した。

巻頭に三絃譜の説明、「諸記号及省略譜」の解説あり。刊記によると、第9巻が最初に刊行されている。③の第8巻が昭和36（1961）年に刊行されて以来、初めての譜本刊行で、③から名称を変えた後継版と推測する。第9巻にのみ、③と同様「三世杵屋栄蔵師校訂」の文言が入る。昭和46（1971）年には第1巻の改訂版、昭和47年には第2巻、第3巻の改訂版を出し、昭和49年から昭和52年まで、ほぼ1年1巻のペースで第10巻から第14巻を刊行。それと並行して、昭和50年には第4巻の改訂版、昭和51年には第5巻の改訂版、昭和52年には第6巻の改訂版を刊行している。

なお、第7巻と第8巻が見あたらないが、現在確認できる『栄二・三絃譜』の第1巻から第6巻が「改訂再版」とあることに鑑みると、第7巻と第8巻も順次改訂して刊行する予定であったのではないだろうか。各巻末にある「栄二・三絃譜既刊目次」に掲載されている7巻・8巻の曲名は、③の7巻・8巻の内容を掲載したと思われる。



（個人蔵）

【表2】⑦『栄二・三絃譜』刊行状況

巻	名称	注記	出版年	発行	所蔵機関		
					東文研	国立劇場	国会図書館
第1巻	栄二・三絃譜 第壹巻	改訂再版	1971/10/**	邦楽社	×	○	○
第2巻	栄二・三絃譜 第貳巻	改訂再版	1972/01/15	邦楽社	×	○	○
第3巻	栄二・三絃譜 第参巻	改訂再版	1972/05/15	邦楽社	×	○	○
第4巻	栄二・三絃譜 第四巻	改訂再版	1975/06/01	杵屋栄二	×	○	○
第5巻	栄二・三絃譜 第五巻	改訂再版／助成金	1976/05/**	杵屋栄二	○	×	○
第6巻	栄二・三絃譜 第六巻	改訂再版／助成金	1977/06/**	杵屋栄二	○	×	○
第7巻	(資料未確認)				×	×	×
第8巻	(資料未確認)				×	×	×
第9巻	栄二・三絃譜 第九巻	三世杵屋栄蔵師校訂	1967/02/20	邦楽社	×	○	○
第10巻	栄二・三絃譜 第十巻		1974/01/01	邦楽社	×	○	○
第11巻	栄二・三絃譜 第十一巻		1975/01/01	邦楽社	×	○	○
第12巻	栄二・三絃譜 第十二巻		1976/01/01	杵屋栄二	○	○	○
第13巻	栄二・三絃譜 第十三巻	助成金	1977/01/**	杵屋栄二	○	○	○
第14巻	栄二・三絃譜 第十四巻	助成金	1977/11/**	杵屋栄二	×	○	○

*表中の「助成金」とは譜本刊記に「重要無形文化財助成金を以て之を作る」の文言があることを示す。

(4) 「栄二譜」の記譜法

「栄二譜」①～⑦すべてにおいて、体裁は縦書きの相対音高譜である。譜の特徴は、数字ではなく文字で記譜されたことである。三味線の一の糸の音高をあらわすには変体仮名、二の糸は平仮名、三の糸は片仮名にそれぞれ書き分けられたことにより、扱う糸と音高が即座に判断できるという利点を備えている。

次に示すのは、⑦『栄二・三絃譜』第14巻の巻頭言²⁰⁾である。「栄二譜」の文字譜の考案は、田中正平²¹⁾の記譜法を基にしたという経緯が、ここから明らかになる。

序(栄二式三絃譜に就て) 杵屋栄二

世界的に有名な故理学博士田中正平先生の定められた、音階名(半音階)を日本読みで記す方法を基にして工夫したのが、此三絃譜であります。

明治四十年代に東京音楽学校(現芸大)に田中博士を長として、邦楽取調べ(主として採譜)が行なわれておりました。私の亡父(清元栄吉、後に故有って太兵衛を名乗る)も各流の方々と共に伺っておりましたが、その節、先生から教えて戴いた楽譜(五線譜)と、その読み方(後記²²⁾)を私に教えてくれました。この読み方をそのまま、仮名に写し、一の絃は変体仮名、二の絃は平仮名、三の絃は片仮名をもって書くこととし、これによって絃の区別を何等の符号を添加することなしに一目瞭然とし、且つ其他の添加符号(高音を示す付点)を簡略にする事が出来ました。

右によりこの日本読みを考案なされた田中博士、また私にこれを教えてくれた亡父に感謝する次第であります。

長唄の曲の三味線の「手」は、各流派によって差異のあるものです。この三絃譜は恩師三世杵屋栄蔵師と母堂杵屋六葉満師の御両師より教えていただいたままを書きました。また私が他より移入した曲は教えていただいた諸師の手をそのまま何等私の考えを加えずに書いてあります。

「邦楽取調べ」とは、邦楽調査掛²³⁾と推測できる。この言によると、栄二の父は邦楽調査掛の関係者であり、そこで田中正平の記譜法を学び、栄二に教えたという経緯がうかがえる²⁴⁾。

また「栄二譜」を考案した時期については、昭和7（1932）年刊の杵屋栄蔵著『続長唄のうたひ方』に、栄二の記した「三絃譜の解説」の項があり²⁵⁾、そこに「約十八年程以前に、私が考案して使用したものであります。」とあることから、大正3（1914）年頃と推測される。

次に、「栄二譜」の音名対応表（【表3】）と、⑦『栄二・三絃譜』掲載の「諸記号及省略譜」（【資料1】）を示し、「栄二譜」と他の長唄譜の比較を試みる。なお、【資料1】の各欄の上または下に付した番号は、筆者による。

【表3】「栄二譜」音名対応表（ここでの「栄二譜」の音名表記は糸の種別を表すものではない。）

栄二譜	な	ひ	と	ふ	た	み	よ	や	い	つ	む	ね	な
小十郎譜	7	1	#1	2	#2	3	4	#4	5	#5	6	b7	7
相対音高	シ	ド	#ド	レ	#レ	ミ	ファ	#ファ	ソ	#ソ	ラ	bシ	シ

栄二は、音名の構想段階では、〔bソ〕を「め」、〔bラ〕を「え」、〔#ラ〕を「ゆ」など、さらに多くの音名を考えていたそうである²⁶⁾。これらの音は【bソ=#ファ】、【bラ=#ソ】、【#ラ=bシ】と、実質読み替えることができ、「栄二譜」でも「や」、「つ」、「ね」として表記は可能である。しかし、それぞれを別の音として扱いたいという、西洋音楽の調性の概念にも似た、栄二の音と余韻に対するこだわりが窺える。

記譜法は、次の点が「小十郎譜」や「青柳譜」の方式と共通する。

- ・ 1小節は4分の2拍子であること。
- ・ 音名の左に傍線を付して音価を示すこと。
- ・ 休拍を「○」とすること。
- ・ 元の音から1オクターヴ高い場合は音名の右側に点（「・」）を付すこと。

また、奏法記号は【資料1】の①、②、⑥、⑨、⑫、⑭、⑮、⑯、⑰、⑲、⑳、㉓が「小十郎譜」や「青柳譜」の方式と共通する。

いっぽう、次の点が「小十郎譜」や「青柳譜」と異なる。

- ・ 三味線譜と歌詞の配置が逆（「栄二譜」は三味線譜が右）であること。
- ・ 唄の譜（音程）はつけられていないこと（ただし、三味線を伴わない〈謡ガカリ〉や〈鼓唄〉にはつけられている場合もある）。

以下、「栄二譜」①～⑦を比較する。

まず、①とそれ以外で大別できる。①の特徴は、口三味線が記されていることである。

②以降は、口三味線は記されていない。また、歌詞の文字も小さくなったため、行間が狭くなって

いる。また、①でも【資料1】の①、②、④、⑥、⑦、⑧、⑭、⑮、⑯、⑱、⑳、㉓の奏法記号は使用しているが、さらに、③、⑤、⑩、⑪、㉑、㉒などの記号が増えている。その中でも、㉒で示された和音（2本の絃を一度に弾く場合）の表記は、押さえた糸の音名のみを文字譜で記し、開放絃を丸括弧で示す工夫がなされている²⁷⁾。また㉓や㉒のように、旋律名や奏法の名称のみで通用する場合には、譜を記さなかったり、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙のような繰り返しの記号を用い、譜を簡略化している。また、①と同様、唄の譜は書かれていないが、㉚、㉛のとおり矢印を用いて、三味線の音程に対して1オクターヴ高くする指示、低くする指示、三味線と同じ音程に戻す指示を補助的に加えている。

前掲「三絃譜の解説」では、そのあとに《操三番叟》の譜（一部）、《豊の春》、《宝船》、《明の鐘（替唄）》の譜が掲載されており、その記譜法から《操三番叟》の譜は②以降の形式、《豊の春》、《宝船》、《明の鐘（替唄）》の譜は①の形式と捉えることができる。栄二は「三絃譜の記し方が二様に成つてをりますが、操三番叟のは普通私共が記録して置きます様式で、あとの三段の分は稽古本風に書きましたものであります。」と述べており²⁸⁾、この言から、①の譜は一般向けに整理した譜、②以降の譜は“手控え”の要素の強い譜であるとも解釈できる。

（5）まとめ

ここまで、「栄二譜」の書誌情報と刊行状況、そして記譜法を概観した。

「栄二譜」には一冊本と合本の7種の譜本があることを確認した。記譜法は奏法記号も多用した文字による相対音高譜で、形式は2種類に大別できた。

譜本刊行の過程では、とくに合本の刊行状況が複雑であることが分かった。合本は、名称を変えながら刊行していたが、その際、新たに第1巻から始めるのではなく、それ以前の譜本の巻数に続けて刊行していたため、結果として全体像が複雑になっている。これには出版事情（発行者が栄二の個人出版から株式会社邦楽社に、そして再び栄二自身に戻ったこと）や²⁹⁾、曲目の組み合わせの方針が関わっていたと思われる。

これらの譜本で確認した総曲目数は210曲で、曲目の一覧を、本稿末尾に【「栄二譜」曲目一覧（稿）】として掲載した。採譜曲の内訳は、江戸時代末までの曲が128曲（全体の60.9%）、明治以降の曲が67曲（全体の31.9%）、そのうち、3世杵屋栄蔵・栄二自身の作品（復曲も含める）は38曲（全体の18%）、明治以降の作曲で、栄蔵・栄二の作品以外の曲は29曲（全体の13.8%）であった。なお、譜本が見えぬために作曲年代不明とした曲と、譜本は確認したが作曲年代が不明である曲は、合わせて15曲（全体の7.1%）あった。

古典曲は「栄二譜」の最初期にほとんど採譜され、次第に栄蔵の作品と自作曲が加わるようになった。なお、栄蔵の作品の採譜は、杵屋栄津郎³⁰⁾が『杵栄新曲撰集』として昭和17（1942）年に刊行した譜本がある。記譜法は「栄二譜」をもとにしたことが、その冒頭に記されている³¹⁾。

また、①『三絃譜附長唄稽古本』、③『長唄三絃譜』以外には非売品として刊行されたが、そのうちの一部の譜本の製作費は、重要無形文化財（各個認定）保持者（人間国宝）となった栄二に付与される、助成金が充てられた。次項にて考察する。

3. 重要無形文化財（各個認定）保持者への認定と譜本の刊行

（1）重要無形文化財（各個認定）保持者への認定

栄二は、昭和39年4月21日に、重要無形文化財の、種別「音楽」名称「長唄三味線」（以下、【音楽・長唄三味線】などと表記）の保持者に認定された。認定理由は、「三世杵屋栄蔵門下にあつて、すぐれた技倆を有し、柔らかな音色と堅実な撥さばきに特色がある。長期にわたつて歌舞伎の音楽部門を担当し、歌舞伎音楽について豊富な知識を持つ。また衰滅に瀕している長唄の古曲を積極的に探求して、これを習得し、歌舞伎の舞台や長唄の演奏会に復活した。記録を完了した数十曲を出版したこともあるが、伝承曲数約五百曲に及び、すぐれた演奏家であるとともに熱心な研究者である。」とある³²⁾。

なお現在、長唄三味線演奏家が関係する重要無形文化財には、【音楽・長唄三味線】と【歌舞伎・歌舞伎音楽長唄】がある。栄二の、大正10年からタテ三味線で歌舞伎に出演していた経歴などに鑑みると、歌舞伎音楽演奏家としての業績も際立つため、【歌舞伎・歌舞伎音楽長唄】でも相応しいように感じられる。しかし、【歌舞伎・歌舞伎音楽長唄】は、第25次指定（昭和53年4月26日）以降のことである。

（2）助成金による譜本の刊行

重要無形文化財（各個認定）保持者には、毎年「重要無形文化財保存特別助成金」が付与される。栄二は、認定以前にも譜本の作成は行っていたが、認定後はその助成金で譜本の出版を行った。その場合は、譜本の奥書に「重要無形文化財助成金にて之を作る」と明記されている。この文言が入った「栄二譜」は、⑥『栄二譜本』と⑦『栄二・三絃譜』第5、6、13、14巻である。

戦後30年以上にわたり一緒に舞台を勤めた2世芳村五郎治は、栄二の追悼記事で以下のようにふり返る。

人間国宝になられてからは国から年金がおりのようになったのですが、それを全部譜本の発行に使われていたようです。「栄二三絃譜³³⁾」が全十四巻ですから一五〇曲近くになりますが、そのあとがきに「重要無形文化財の助成金をもってこれを作る 非売品」と書いてあります。「これは誠に大変なことなので、適当な値段でお頒けになったら如何ですか」と申し上げたんですが、「これは、こう云う事で助成金でやるのだから結構です」と云われてどうしても意見をおとりになりませんでした。（『歌舞伎音楽 きがく』昭和55（1980）年7月号）

また栄二自身も、以下の興味深い発言をしている。

わたくしの知ってる銀行員で、もう六十いくつですが、清元の譜本を書いてる人がいるんですよ。これは丹念な譜本ですわ。とてもおもしろうとは思えない素晴らしいもので、文部省から芸術選奨、奨励賞を戴いたんですけど、ほとんど売れやしませんからつぎ込みでさァね。ですからわれ

われみたいに商売にしてて、それで助成金を戴いたらなんとかしなきゃ申しわけないんじゃないですか。文化庁から戴いても皆さんの税金を戴いているわけですからね。（『日本の速記』“人間国宝は語る”〈芸能の部〉昭和46（1971）年。）

これはまさに、浅田正徹のことである³⁴⁾。浅田と栄二は親交があり、浅田は栄二に採譜や印刷方法について助言を仰いでいた。この言から、採譜の労力がはかり知れないことを認識していた栄二の、浅田に対する敬意が伝わってくる。

また、譜本刊行の見通しについては、以下のように語っている。発言の年代や内容から、⑦『栄二・三絃譜』の刊行のことである。

あと十年生きて、八十八までに十一冊をこしらえる予定。そうしますと二百番、譜に残りませんね。それをしめないと、わたくしを重要無形文化財にご指定くださった方がたに申しわけないですよ。あの助成金はわたくしに下さるわけじゃないんです。自分の知ってることをあとに遺してゆけ、後継者を養成しろということなんですね。（『日本の速記』“人間国宝は語る”〈芸能の部〉昭和46（1971）年）

今書いておるのが十三巻目です。一卷十曲ずつ採録しておりますので、これができると百三十曲、二十五巻まで出す予定にしておりますが、全部で二百五十曲ほどですね。（中略）

浅川玉兎さんの『長唄要説』³⁵⁾は既刊五冊、収録二百二十曲、これでほとんど必要なものは尽くされていると思いますので、私も二百五十曲まとめたいと思っているわけです。（『季刊邦楽』昭和51（1976）年1月号）

栄二は、新しく譜を刊行すると同時に、既刊楽譜の改訂も進めていた³⁶⁾。管見では『栄二・三絃譜』は第14巻までであったが、中川清一編『長唄年表』によって、栄二の採譜曲の多さが裏付けられる。

東京音楽学校編『近世邦楽年表』に引き続き、明治以降の長唄の初演を記録した中川清一編『長唄年表』に、栄二は校閲者としてかかわっていたが、栄二が採譜した曲には○印を付したことが、凡例でことわられている。○印のある曲を191曲、また、○印はないが、栄二の作品（合作・復曲・補曲も含める）を63曲確認した。おそらく、栄二の新曲にも譜があると考えるのが自然なので、これらを合計すると254曲となる。『長唄年表』が刊行されたのは昭和40（1965）年7月で、⑦『栄二・三絃譜』を刊行する2年前のことであるが、その時点で、本稿で示した「栄二譜」に含まれていない曲は192曲にもものぼっている。なお、これらは明治以降の曲なので、それ以前の曲も採譜していたであろうことは想像に難くない。

4. 「栄二譜」の価値

「栄二譜」は、採譜曲目が多岐にわたり、長唄を研究する上で重要な譜本であることに相違ないが、他の長唄譜に比べてあまり普及しなかったようである。その理由として、譜本の多くが私家版（非売品）で、入手困難であったことや、すでに数字譜に慣れている者にとって、栄二の記譜法は難読であったことが考えられる。

「栄二譜」の所収曲目は、長唄の古典曲から明治以降の新曲に至るまで、流派による偏りがない。これは、栄二が流派を越えて伝承者を訪ね、教えを受けたという努力の賜物である。《傾城無間の鐘》もさることながら、現在あまり演奏の機会がない曲を知るために、「栄二譜」を開く場合が頻繁にある。それは単に演奏するためだけではなく、栄二が譜の余白に記した、覚書を確認するためでもある。この覚書には、初演年月や初演役者・演奏者、伝承経路（誰から教えを受けたか）、流派による手（三味線の旋律や奏法）の違い（曲によっては合方全てなど）が細かく記されており、演奏者あるいは研究者が心得ておくべき事項が詰まっている。「栄二譜」は1曲分の情報量が多く、事典としての役割を持った譜本と言える。

「栄二譜」は、国立劇場や国立国会図書館などのおおやけの機関のほか、栄二と親交のあった人が主な所有者であった。「栄二譜」の中でも④『杵栄稽古本』、⑤『杵栄譜本』、⑥『栄二譜本』は、「研修会」の参加者に限られてくるので、筆者自身も、全てを把握することは難しいと感じている。しかし、今回の調査で少しずつ明らかになった「栄二譜」の概要をここに示すことで、活用の一助となれば幸いである。

栄二の没後34年になる今年、杵栄派家元の8世芳村伊十郎（5世杵屋栄蔵）氏によって、栄二が著した楽譜を後世に伝えるべく、本稿でも対象とした『三絃譜附長唄稽古本』の復刻版が、第1巻から順次刊行されることになった³⁷⁾。前掲の『三絃譜附長唄稽古本』の「序」に、3世杵屋栄蔵の手を忠実に採譜したと明記されていた譜本の復刊は、杵栄派の伝承を研究する上でも重要な資料となりうるであろう。

おわりに

本稿では、杵屋栄二が採譜・刊行した「栄二譜」を分析した。栄二は、長年にわたる歌舞伎出演で浴び続けた舞台照明の影響もあり、晩年は視力低下の難を抱えていたという。そのような状況下での譜本刊行であったが、後世に長唄を伝承させるという栄二の熱意は、労作「栄二譜」を拠り所としてふりかえることができる。

栄二の足跡をたどるには、重要無形文化財保持者への認定理由でも明言されているとおり、演奏家、そして研究者としての業績の、それぞれを包括したものとならなければならない。また、本稿では栄二が採譜した譜本のうち、刊行されたものを扱ったが、『長唄年表』（中川清一編）に示された栄二の採譜曲目数からも、「栄二譜」はこれだけではないことが明らかであるため、今後も研究の余地は大いにある。

本報告を行うにあたり、資料提供・御助言を賜った8世芳村伊十郎氏（長唄唄方）、稀音家義丸氏（長唄唄方）、町田道彦氏（株式会社邦楽社）、安倍公子氏（株式会社邦楽社）、所蔵機関各位に深謝申し上げます。また、筆者の母（旧名・杵屋栄寿。東京藝術大学在籍中に5年間、修了後、15年間杵屋栄二に師事。のちに日吉流に所属し、日吉栄寿となる。）からも情報収集を行ったことを、ここに記しておく。

《参考文献》

- 杵屋栄蔵『続長唄のうたひ方』、東京：創元社、1932年。
- 株式会社邦楽社編『邦楽社出版図書目録』、1959年～1981年。
- 杵屋栄蔵監修・杵屋栄二校閲・中川清一編『長唄年表』、1965年、私家版。
- 町田佳聲・植田隆之助編『現代邦楽名鑑』長唄編、東京：邦楽と舞踊出版部、1966年。
- 社団法人日本速記協会『日本の速記』“人間国宝は語る”〈芸能の部〉①～③、1971年。
- 「人間国宝シリーズ 対談 杵屋栄二・小塩高弘」『季刊邦楽』第6号、東京：邦楽社、1976年1月。
- 文化庁監修、重要無形文化財保持者会編『無形文化財要覧』、東京：芸艸堂、1978年。
- 伎楽会編『歌舞伎音楽 きがく』、1980年7月。
- 平野健次・上参郷祐康・蒲生郷昭監修『日本音楽大事典』、東京：平凡社、1989年。
- 鈴木徹造『出版人物事典 明治一平成物故出版人』、東京：出版ニュース社、1996年。
- 朝日新聞社『週刊人間国宝』9、芸能音楽①、週刊朝日百科、2006年7月。
- 文化庁文化財部伝統文化課『無形文化財／民俗文化財／文化財保存技術 指定等一覧』、2010年。

《注》

- 1) 明治・大正期の書家（生没年1852-1915）。清元節《青海波》、長唄《多摩川》の作詞者として知られる。
- 2) 長唄三味線方（生没年1890-1967）。杵栄派、芳村派の家元。歌舞伎座邦楽部長、長唄協会会長などを歴任。日本芸術院会員。
- 3) 社団法人日本速記協会『日本の速記』“人間国宝は語る”〈芸能の部〉②、1971年、7頁。
- 4) 長唄三味線方（生没年1899-1970）。昭和30年、「長唄三味線」で重要無形文化財（各個認定）保持者となる。東京藝術大学音楽学部邦楽科教授。長唄東音会を組織した。日本芸術院会員、文化功労者。
- 5) 明治40（1907）年に、日本音楽の調査・保存を目的として東京音楽学校に設置された研究機関。
- 6) 勘所を数字で表した譜。勘所の数だけ数字を覚える必要があるが、三味線の調子が変わっても、数字が示す勘所は同じ、という利点がある。
- 7) 五線譜の原理に則り、音名を数字あるいは文字に置き換えた譜。三味線の調子が変わると、その前後で同じ数字でも勘所が変わるが、数字は少なくともすむという利点がある。
- 8) 杵屋弥之介の本名が青柳姓であったため、一般に「青柳譜」という。
- 9) 享保16（1731）年2月、江戸中村座初演《傾城福引名護屋》第2番目に初演。初演のタテ三味線

は杵屋太十郎。

- 10) 《傾城無間の鐘》は、栄二と同じく杵屋喜久寿に教えを受けた4世杵家弥七が、栄二より先に採譜・出版したという（稀音家義丸「長唄囃語（五十七）むけんの鐘」『邦楽の友』2008年1月号、32頁～33頁）。
- 11) 社団法人日本速記協会『日本の速記』“人間国宝は語る”〈芸能の部〉②、1971年、9頁。
- 12) このほかに、「文化譜」による譜本も2冊（1冊は『長唄舞踊小曲集』として《菊づくし》《関の小万》《鎗奴》《歌舞伎踊》の4曲、もう1冊は《加賀の菊》《馬場先踊》《藤音頭》の合本）確認したが、記譜の形態が異なるため、ここでは含めなかった。
- 13) 明治5（1872）年に創業した書店。明治41年から、音曲書、俗曲稽古本の出版に力を注いだ（鈴木徹造『出版人物事典 明治－平成物故出版人』265頁）。
- 14) 三味線の勘所を記した紙。棹に貼付して使用する。おもに初心者、勘所を覚える補助となるもの。
- 15) 昭和18（1943）年に設立された出版社。昭和18年当時の社名は「邦楽出版株式会社」。現在の社名「株式会社邦楽社」となったのは昭和21年。三味線音楽や箏曲など、近世邦楽の楽譜や書籍を出版している。
- 16) 拙稿「〔資料紹介〕浅田正徹採譜楽譜」『無形文化遺産研究報告』第5号、77頁～107頁（東京文化財研究所無形文化遺産部、2011年3月発行）参照。
- 17) 平成25年1月15日、稀音家義丸氏談。
- 18) 長唄三味線方（生没年1894－1982）。芳村派、杵栄派に所属。『歌舞伎音楽集成』江戸編・上方編を著す。昭和53（1978）年、「歌舞伎音楽長唄」で重要無形文化財（各個認定）保持者となる。
- 19) 長唄唄方（生没年1901－1993）。芳村派に所属。昭和56（1981）年、「歌舞伎音楽長唄」で重要無形文化財（各個認定）保持者となる。日本芸術院会員。
- 20) 巻によって、巻頭言の文言にも差異があることを確認した。これは譜本の刊行時期によるもので（【表1】参照）、最初に刊行された第9巻は③『長唄三絃譜』と共通し、第1巻から第5巻、第10巻から第12巻は、本文に示した第14巻巻頭言の第3段落までであった。
- 21) 物理学者、音楽学者（生没年1862－1945）。自宅に邦楽研究所を設け、三絃楽速記法を考案。五線譜による記譜を行い、若手邦楽家の養成に尽力した。1921年、邦楽教育調査委員などをつとめた。門弟に、吉住小十郎。
- 22) この言のあとに、楽譜の読み方が示されている。
- 23) 前掲注5に同じ。
- 24) 田中正平と邦楽調査掛との関係は、今後あらためて調査する予定である。
- 25) 杵屋栄蔵『続長唄のうたひ方』、東京：創元社、1932年、347頁～362頁。
- 26) そのほか、3の糸の勘所「ト」（#ド）と「フ」（レ）の音の扱いにも気を配っていたという（平成25年1月15日、稀音家義丸氏談）。
- 27) 1の糸を押さえて2の糸を開放するなど、押さえる糸が開放する糸より内側で、左手の形が棹に対してアーチ状になる場合は、文字譜の上に丸括弧を付し、3の糸を押さえて2の糸を開放するな

ど、押さえる糸が開放する糸より外側の場合は、文字譜の下に丸括弧を付すという区別があった。

28) 前掲注25に同じ。

29) ③『長唄三絃譜』、⑦『栄二・三絃譜』の発行所となっていた株式会社邦楽社では、『邦楽社出版図書総目録』（以下、『総目録』）を発行している。『総目録』に掲載された「栄二譜」の書名は、すべて『長唄三絃譜』となっていた。『栄二・三絃譜』と書名が変わって「非売品」と明記され、発行者が邦楽社から栄二自身になってからも掲載があり、さらに栄二の没後も2年ほど掲載が続いていた。

30) 長唄三味線方。3世杵屋栄蔵の門弟。

31) 杵屋栄津郎の譜は『杵栄新曲撰集』だけではなく、長唄の古典曲も数多く採譜していたことが、杵屋栄津郎『長唄楽譜の読み方』の索引より明らかになった。しかし、「栄二譜」よりも一般化しておらず、筆者は現在のところ、『杵栄新曲撰集』と『長唄楽譜第二期第三輯』の《勝三郎 船弁慶》《鞍馬山（上調子）》《漁樵問答》《小鍛冶（替手）》の4曲を所収する合本1冊の、計2冊を確認するのみである。今後、栄津郎による譜本を網羅的に調査できる機会があれば、あらためて報告する。

32) 文化庁監修、重要無形文化財保持者会編『無形文化財要覧』、東京：芸艸堂、1978年、39頁。

33) 『栄二・三絃譜』のこと。

34) 前掲注16に同じ。

35) 浅川玉兎『長唄名曲要説』のこと。長唄の曲目解説書として最もまとまった書。

36) 【表1】参照。

37) 平成25年3月現在、第1巻から第3巻の復刻版が刊行されている。

【「栄二譜」曲目一覧（稿）】凡例

- 本一覧は、刊行された「栄二譜」所収の曲目を、五十音順に列挙したものである。
- 本一覧は、見開き1頁の1列に、1曲分の情報を掲載している。
- 表記は、原則として通行の字体を用いた。
- 「曲名よみ」は「譜本曲名」に基づいているが、通行の呼称を採用したため、必ずしも「譜本曲名」とは一致しない。また、曲種を表す「めりやす」や、同名曲で作曲年代の新旧を表す以外の「新曲」など、通常、曲名とは別扱いとするものは省いた。
- 上下分冊で採譜された曲は、「曲名よみ」で番号を付して、分離しないようにした。
- 「譜本曲名」は、譜本の内題（譜が始まる直前の曲名）をもとにした。原本表記に従い、本名題や別名を（ ）で補っているものもある。
- 「作曲者/作曲年代（作詞者等）」は、譜本内題下および譜本末尾に記載されている作曲者名・作曲年代などの情報を記した。したがって、現在の認識とは異なる場合もある。「不明」と書かれた曲や、記載が無かった曲、曲自体が判別できない場合には「不明」と記した。
- 「譜本名称」は、本文第2節（3）に対応している。
- 「譜本番号」は、一冊本では各譜本に付された番号、合本では巻数と曲順を示すこととした。
例）44＝第44編、1-1＝第1巻第1曲目。
- 「所蔵機関」「刊記」「備考」の丸数字は、「譜本名称」を表す。
- 「所蔵機関」は、「栄二譜」の所蔵が確認された機関のうち、東文研・国立劇場（「国立」と表記）・国立国会図書館（「国会」と表記）の状況を示した。なお、「所蔵機関」がすべて空欄の場合は、個人蔵の譜本で情報を確認したことを示す。
- 表中に示した「10杵屋六左衛門」など、人名の前に数字を付した表記は、その人物の代数を表す。したがって「10杵屋六左衛門」は、10世杵屋六左衛門を示す。
- 「刊記」には、一冊本の刊記に書かれている日付を西暦で記した。「発行」などが明記されていない場合は、日付のみを記した。なお、合本の刊記は【表1】にまとめてある。
- 「備考」には、栄二が譜本に記した覚書や、特記すべき書誌情報を記した。なお、栄二の覚書は、本来ならば全てを転写すべきであるが、紙幅の都合で筆者が要約したものもある。

②=『栄二三絃譜』 ③=『長唄三絃譜』 ④=『杵栄稽古本』 ⑤=『杵栄譜本』 ⑥=『栄二譜本』 ⑦=『栄二・三絃譜』

番号	所蔵機関			刊記	備考
	東文研	国立	国会		
1				①1938/11/20発行。	
2		⑦	⑦	①1929/10/15発行。	①内題に「替唄」とある。唄い出し：うめさくら。②⑦元の歌詞と替唄の歌詞の2種類を記載。
3		⑦	⑦		⑦大札博覧会（昭和3年5月1-3日、上野）よし町花柳界連中上演。
4		⑦	⑦		
5		⑦	⑦		②⑦3松島庄五郎から教えを受けたという「三日の月」のあとの別の合方の譜あり。
6		⑦	⑦		⑦第15回長唄東紫会新曲（昭和5年2月27日）。演奏者連名あり。
7	⑦	③	⑦	①1936/08/08発行、1942/03/**再版。	①譜本は2種類あり。
8		⑤		⑤1974/01/**。	⑤第73会鶴命会（昭和10年4月26日）開曲。昭和48年11月11日杵栄会大会で作曲当時の型に戻す。
9		⑦	⑦		②⑦初演時の「其恋草は〜御祈禱なり」、「相生の〜若緑」までの譜あり。
10	⑦	③	⑦	①1934/07/13発行、1938/11/**再版。	①譜本は2種類あり。
11		⑦	⑦	①1934/08/26発行。	②⑦譜本表紙の目次では7曲目。
12		⑦	⑦		⑦昭和35年5月東横ホールにて上演。『春曙五彩画』五変化の一。
13	⑤	⑤⑦	⑦	⑤1973/05/**。1977/02/**再版。	②⑦譜本表紙の目次では6曲目。⑤初版と改訂再版2種類あり。正本連名あり。追善の人物についての覚書。
14		⑦	⑦	①1936/03/28発行。	
15		⑦	⑦		⑦「春は萌出る」より「哀れなり」の後の合方迄は杵屋正彦の補作という。
16		⑤		⑤1974/05/**。	⑤明治31年「一條大蔵卿」曲舞の場に使用したというが作曲家杵屋正治郎は明治29年没。
17	⑥	⑥⑦	⑦	⑥1971/09/**。	⑥「栄二譜本」とある（譜本番号としては「杵栄譜本」の範囲）。
18	⑤	⑤		①1934/07/13発行。⑤1972/01/**。	
19	④			④1970/01/**。	④上：胡蝶之舞、下：松随舞
20				①1934/12/13発行。	
21	⑦	③	⑦		
22	⑤	⑤⑦	⑦	⑤1972/09/**。	
23	⑦	⑦	⑦		⑦松竹舞踊会（昭和16年5月21-25日）に開曲。
24	⑦	⑦	⑦		
25		⑦	⑦		
26	⑤	⑤⑦	⑦	⑤1972/08/**。	
27				①1930/05/05発行、1940/03/**再版。	①譜本は2種類あり。
28	⑦		⑦	①1934/08/24発行。	
29		⑦	⑦		
30	⑦	⑦	⑦	①1937/01/28発行、1940/09/06再版。	①譜本は2種類あり。
31	⑦		⑦	⑤1971/12/**。	
32		⑦	⑦	①1936/06/06発行。	
33	⑥	⑥		⑥1976/08/**。	⑥《鈴の段》の譜あり。
34		⑦	⑦	①1937/01/28発行。	
35		⑤		⑤1974/04/**。	⑤常磐津との掛合のために作曲。その後長唄のために改作。
36	⑦		⑦		③⑦昭和33年3月25日松坂屋ホール。菊と桜の会「女人抄」の内。振付・立方：坂東志満。
37	④			④1970/03/**。	
38		⑦	⑦	①1929/10/15発行、1930/01/25発行、1940/03/28再版。	①譜本は3種類あり。1929年の発行では第1編、1930年発行、1940年再版では第2編。
39	⑤	⑤		⑤1972/05/**。	⑤日本舞踊協会5周年記念（昭和11年3月・東京劇場）。波多海蔵氏を祝う新曲。
40		⑦	⑦		
41	⑥			⑥1944/05/**3世杵屋栄蔵校訂、1976/11/**。	⑥既刊目次あり。
42	⑦	⑦	⑦		
43			①	①1937/09/26発行。	
44				①不明。	①資料未確認。既刊目次による。
45				①1939/06/11発行。	
46		⑦	⑦		
47	⑦	⑦	⑦		⑦初演時の考証と舞踊中村流の段切の譜あり。
48	⑤	⑤		⑤1973/02/**。	⑤昭和3年11月26-27日東京帝国劇場にて開曲。長唄協会員一同演奏「御大典奉祝 新曲」。
49	⑦	⑦	⑦	①1931/08/08発行。	①譜本は2種類あり。
50		⑦	⑦		
51		⑦	⑦	①1935/09/03発行。	②⑦若柳流の舞踊曲として作曲。
52	⑥			⑥1976/05/**。	⑥「脇狂言」の説明。
53		⑦	⑦	①1934/02/22発行。	⑦3杵屋正治郎17歳の処女作との言伝えあり（6芳村伊十郎談）。
54		⑦	①⑦	①1938/05/23発行。	
55	④			④1970/08/**。	
56	⑥			⑥1975/11/**。	⑥正本連名あり。
57	⑦		⑦		③⑦第83回長唄鶴命会に発表。
58	⑥	⑥		⑥1976/11/**。	

①=『三絃譜附長唄稽古本』

番号	曲名よみ	譜本曲名	作曲者/作曲年代(作詞者等)	譜本名称・譜本番号						
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
59	くまどりあたかまつ	隈取安宅松	富士田吉治・藤間勘左衛門/明和6			6-4				6-4
60	くものひょうしまい	我背子恋合榎(蜘蛛拍子舞)	1杵屋佐吉/天明1	42		4-3				4-3
61	くろかみ	めりやす 黒髪	1杵屋佐吉/天明4	1	1-2					1-2
62	けいせい	傾城(選桜手爾葉七字)	9杵屋六左衛門/文化8					83		12-4
63	けいせい	傾城(四季詠寄三大字)	1杵屋勝五郎/文化10					97		11-2
64	けいせい	傾城(柳雛諸鳥囀)	杵屋栄二復曲/昭和38							13-9
65	けいせい	傾城(拙筆力七以呂波)	4杵屋三郎助/文政11	13						9-7
66	けいせい	傾城(初雁)	杵屋栄二復曲/昭和37							14-10
67	けいせい	八月傾城(花■十二月所作)	2杵屋勝五郎/天保11			7-9	68			
68	けいせいむげんのかね	傾城むげんの鐘	坂田兵四郎(推定)/享保16							11-1
69	げきぶしかいらいし	外記節 傀儡師	4杵屋三郎助/天保7				76	76		
70	げきぶしきる	外記節 猿	4杵屋三郎助/文政7	45		5-8				5-8
71	げつかのつる	月下鶴(月五首)	11杵屋六左衛門/元治1				74			9-6
72	げつぜんのきぬた	月前の砧	杵屋彦次郎/嘉永7				73	73		
73	こいおとこしらべのまつかぜ	恋男調松風	4杵屋六三郎/文化9				64			
74	こかじ	小鍛冶	2杵屋勝五郎/文政4	33		4-6				4-6
75	ごだりき	めりやす 五大力	杵屋彌十郎/寛政7		3-1					3-1
76	ことぶき	めりやす 寿	不明	11	2-1					2-1
77	ことぶき	めりやす 寿	1杵屋六翁/嘉永6						123	14-1
78	ことぶきさんぼそう	寿三番叟	3杵屋栄藏編作曲/昭和12					87		
79	ことぶきになんしょうじょう	寿二人猩々	9杵屋六左衛門/不明					93		
80	こまうり	独楽売	3杵屋栄藏/大正12(岡鬼太郎作詞)				53			
81	こもそう	こもそう(其容形七枚起請)	富士田吉治・杵屋作十郎/明和7							10-3
82	ごろう	時致(五郎)	10杵屋六左衛門/天保12	30						10-6
83	さがみあま	相模童(選桜手爾葉七字)	9杵屋六左衛門/文化8					77		12-9
84	さぎむすめ	鶯娘(柳雛諸鳥囀)	富士田吉治・杵屋忠次郎/宝暦12							13-7
85	さくらがり	桜狩	10杵屋六左衛門/不明	12		8-2				
86	ささぐるはな	捧る花	12杵屋六左衛門/明治31					84		
87	ささのつゆ	笹の露	3杵屋栄藏/昭和16(佐藤要作詞)			5-7				5-7
88	ざとう	座頭(選桜手爾葉七字)	9杵屋六左衛門/文化8							12-5
89	さとのしき	里酒四季	13杵屋六左衛門・5杵屋勘五郎/明治37	9	3-3		9			3-3
90	さんきょくしょうちくばい	三曲松竹梅	杵屋照海/元治1				61			
91	さんぼうしょう	三宝鈔	杵屋栄二/昭和29(香取仙之助作詞)							10-10
92	しおくみ	汐浪(七枚続花の姿絵)	2杵屋正次郎/文化8	36		4-1				4-1
93	しかくぼしらするのくせまい	三升猿曲舞	4杵屋六三郎/文政2	16		7-2				
94	しきのながめ	四季の詠	12杵屋六左衛門/明治5					86		
95	しきのにぎわい	四季の賑	3杵屋栄藏/明治42(永井素岳作詞)				54	54		
96	しきのはなざと	四季の花里	5杵屋三郎助/安政6					79		
97	しきのほし	四季の星	杵屋栄二/昭和33(瀧美清太郎作詞)			8-10				
98	しきのやまんぼ	四季の山姥	3杵屋勘五郎/文久3		2-8					2-7
99	しずはたおび	八重霞鏡機帯	4杵屋三郎助/文政11	48						9-5
100	しちだんめおかる	七段目おかる	2杵屋勝三郎/弘化4	16		7-3				
101	しちふくじん	七福神	不明	43						
102	しゃつきょう	外記節 石橋	10杵屋六左衛門/文政3			8-5				
103	じゅうにだん-1	十二段 上の巻	1杵屋六翁/嘉永年間						126	
104	じゅうにだん-2	十二段 下の巻	1杵屋六翁/嘉永年間						127	
105	しゅしょうき	朱鐘燧(選桜手爾葉七字)	杵屋栄二復曲/昭和30							12-10
106	しゅんきょうかがみじし	春興鏡獅子	3杵屋正治郎/明治26		1-8					1-8
107	しょうちくばい	松竹梅(室咲)	2杵屋正次郎/不明				62			
108	しらがしらついのたつやり	白頭対達鐘	3杵屋栄藏/昭和3					111		
109	しらびょうしのはなのえん	舞妓の花の宴(鴛雀男舞)	10杵屋六左衛門/天保9	15	2-4					2-4
110	しろざけうり	白酒売(春昔由縁矣)	1杵屋正次郎/天明5			4-9				4-9
111	しんえんのあした	新曲 神苑の朝	3杵屋栄藏/昭和13(河上溪介作詞)	40						13-6
112	しんきみがよ	新君賀代	12杵屋六左衛門/明治32	8		6-9				6-9
113	しんきょくうらしま	新曲浦島	13杵屋六左衛門・5杵屋勘五郎/明治39(坪内逍遙作歌)	29						
114	しんさぎむすめ	新鶯娘(花瓶曆色所八景)	10杵屋六左衛門/天保10						124	
115	しんしゃつきょう	新石橋(牡丹蝶扇彩)	3杵屋正治郎/明治11					110		
116	しんだいごのはなみ	新醍醐の花見	杵屋栄二/昭和27(松本龟松作詞)							3-10
117	しんへいけものがたり	新平家物語	杵屋栄二/昭和32(吉川英治原作)							2-10

②=『栄二三絃譜』 ③=『長唄三絃譜』 ④=『杵栄稽古本』 ⑤=『杵栄譜本』 ⑥=『栄二譜本』 ⑦=『栄二・三絃譜』

番号	所蔵機関			刊記	備考
	東文研	国立	国会		
59	⑦		⑦		
60		⑦	⑦	①1938/09/29発行。	
61		⑦	⑦	①1929/10/15発行。	
62	⑦	⑦	⑦		
63		⑤⑦	⑦	⑤1973/08/**。	
64	⑦	⑦	⑦		⑦昭和38年NHK-TV大谷友右衛門が「鶯娘」と組に上演のため依頼にて復曲。
65		⑦	⑦	①1934/02/22発行。	
66		⑦	⑦		⑦杵屋篤子が伝承していた曲とは別曲。作曲の経緯が書かれている。
67	④			④1970/07/**。	譜本曲名の■は「兄」と「弟」の合字。
68		⑦	⑦		
69	④	⑤		④1971/07/**。⑤1971/07/**。1975/03/**再版。	
70	⑦	③	⑦	①1938/11/20発行。	
71	④	⑦	⑦	④1971/04/**。	⑦10杵屋六左衛門七回忌追善曲。「月五首」の解説と《月下鶴》の演奏者連名。
72	④	⑤		④1970/11/**。⑤1970/11/**。1975/03/**再版。	
73	④			④1970/02/**。	
74		⑦	⑦	①1936/09/20発行。	
75		⑦	⑦		
76		⑦	⑦	①1933/12/04発行。	
77	⑦	⑦	⑦	⑥1977/01/**。	⑦「替手は堅田喜千治さんより頂いたものです。」正本連名あり。
78	⑤	⑤		⑤1972/07/**。	⑤「三代杵屋栄蔵師が杵栄派弾初用として、雛鶴三番曳を改編曲したるもの」
79		⑤		⑤1973/04/**。	⑤増補部分「年たち時来り～」の採譜あり。4(5)杵屋巳太郎作曲部分。
80					譜本名称：「栄二・三絃譜 第五十三」。初演：大正12年3月第2回羽衣会。
81		⑦	⑦		
82		⑦	⑦	①1936/08/08発行。	
83	⑤⑦	⑤⑦	⑦	⑤1971/08/**。	
84	⑦	⑦	⑦		⑦3杵屋正治郎増補改訂の譜あり。
85				①1933/12/15発行。	
86	⑤	⑤		⑤1972/05/**。	⑤寛都30年祭新曲（明治31年4月）。
87	⑦	③	⑦		③⑦杵屋栄美次事よし町芸妓金本さだ初七日手向新曲。前弾・後奏栄二補曲(昭和24年4月)。
88	⑦	⑦	⑦		⑦素唄としては消滅。舞踊中村流にのみに残る貴重な曲。中村芝賀より教えるを受ける。
89	④	⑦	⑦	①1932/10/03発行。1933/02/27発行。④1970/04/**再版。	①譜本は2種類あり。②⑦「通ふらん」まで13杵屋六左衛門、それ以降⑤杵屋勘五郎作曲という。
90	④			④1969/09/**。	
91		⑦	⑦		⑦花柳徳太郎喜寿祝の舞踊会（昭和29年10月27日）に開曲。
92		⑦	①⑦	①1937/05/31発行。	
93				①1934/04/23発行。	
94	⑤	⑤		⑤1972/06/**。	
95	④	⑤		④1968/07/**。⑤1968/07/**成。1974/01/**再版。	④⑤内題なし。明治42年、下谷同期町芸妓検番の新曲。花柳界の新曲で3杵屋栄蔵初めての作曲。
96	⑤	⑤		⑤1971/10/**。	⑤研精会の伝承とは異なるとのこと。5杵屋勘五郎から3杵屋栄蔵に伝えられたものという。
97					③4杵家弥七氏十七回忌追善曲（依頼により作曲）。
98		⑦	⑦		②⑦「虫の合方」は2種類ある。
99		⑦	⑦	①1939/06/11発行。	
100				①1934/04/23発行。	
101				①1938/09/29発行。	①演奏者によって奏法が異なるが、栄蔵の奏法を記譜したことが書かれている。
102					
103	⑥			⑥1977/06/**。	⑥大正末に3杵屋栄蔵より習う。昭和33年3月の3栄蔵による放送で数箇所改訂。既刊目次あり。
104	⑥			⑥1977/08/**。	
105	⑦	⑦	⑦		
106		⑦	⑦		②⑦舞踊の場合の注記あり。素唄の形式についての注記あり。
107	④			④1969/11/**。	
108	⑤	⑤		⑤1975/03/**。	
109		⑦	⑦	①1934/04/23発行。	
110		⑦	⑦		
111	⑦	⑦	①⑦	①1938/05/23発行。	
112	⑦		⑦	①1932/10/03発行。	
113				①1936/06/06発行。	
114	⑥			⑥1977/02/**。	⑥正本連名あり。
115		⑤		⑤1975/03/**。	⑤明治11年6月新富座。《花見踊》の下の巻として作曲されたもの。
116		⑦	⑦		⑦第3回舞踊百扇会(昭和27年11月26-27日)に開曲。振付：花柳寿太郎。
117		⑦	⑦		⑦《初音の頼み》《鶴ヶ岡悲曲》。長唄協会新曲。

①=『三絃譜附長唄稽古本』

番号	曲名よみ	譜本曲名	作者/作曲年代(作詞者等)	譜本名称・譜本番号						
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
118	ういせんたんぜん	水仙舟前(門出京人形)	杵屋新右衛門/宝暦5				72			
119	すえひろがり	稚美鳥末廣	10杵屋六左衛門/安政1	22		6-7				6-7
120	すがたのかがみせきでらこまち	姿の鏡関寺小町	2杵屋六三郎/明和2						204	
121	すけろく	助六(花魁唇色所八景)	10杵屋六左衛門/天保10	31						10-8
122	せきさんやっこ	奴(関三奴)	4杵屋六三郎/文政9			5-6		104		5-6
123	せきのこまん	関の小万(四季花笠踊)	不明			8-1				
124	せちこそで	歳旦 節小袖	2杵屋勝三郎/嘉永5					106		
125	たいめんはなのはるごま	対面花春駒	1杵屋正次郎/寛政3			4-5		108		4-5
126	たかおさんげのだん	高尾磯梅の段	杵屋新右衛門/寛保4			6-5				6-5
127	たからぶね	宝船	不明	2						
128	たけのひとふし	此君の一節	1杵屋六四郎/不明					82		
129	たつみはっけい	巽八景	10杵屋六左衛門/天保10						117	14-9
130	だてまさむね	伊達政宗	3杵屋栄蔵/昭和15(三枝理学伝土作詞)	50						9-8
131	たまがわ	多摩川	5杵屋勘五郎/明治41(永井素岳作詞)	10		4-4				4-4
132	たまがわのつきのさらしの	玉川月の晒(二人晒・女夫晒)	2杵屋勝五郎/天保13						150	
133	たまぎく	玉菊	3杵屋栄蔵/昭和2(木村富子作詞)	7	3-10					3-9
134	たまものまえ	玉藻前	10杵屋六左衛門/嘉永5					113		
135	ちくまがわ	大薩摩 筑摩川	3杵屋正治郎/明治12	(54)						13-5
136	ちとせのまつ	千歳松	4杵屋六三郎/不明					107		
137	ちようちどりふうりゆうさんばそう	蝶千鳥風流三番曳	3杵屋栄蔵/昭和12(内田水中亭作詞)			8-7				
138	つぎのかおもなかなとりぐさ	月顔最中名取種(鬼次拍子舞)	1杵屋正次郎/寛政5					96		
139	つぎのまき	月の巻(月雪花蒔絵の庭)	4杵屋六三郎/文政10				74	75		
140	つちぐも-1	土蜘蛛中之段	大薩摩浄空/明治7					59		
141	つちぐも-2	土蜘蛛下之段	大薩摩浄空/明治7				60	60		
142	つなやかたのだん	渡辺綱館之段 附曲舞	大薩摩絃太夫/明治2	51						
143	つるかめ	鶴亀	10杵屋六左衛門/嘉永4	27						12-2
144	でっち	丁稚(其九絵彩四季桜)	1杵屋勝五郎/文化12							
145	てながさる	手長猿(親鸞・六)	杵屋栄二/昭和36(吉川英治原作)							11-10
146	ときわのにわ	常盤の庭	10杵屋六左衛門/嘉永4							14-7
147	とくさかり	木賊刈(姿花機七種)	1杵屋正次郎/寛政9					109		
148	とぼえ	鳥羽絵(八重九重花姿絵)	10杵屋六左衛門/天保12				58			9-9
149	ともやっこ	供奴(拙筆力七以呂波)	4杵屋三郎助/文政11							13-4
150	とんびやっこ	初鯉の戯奴僕(鷹奴)	4杵屋六三郎/文化11					80		
151	なりひら	業平(遅桜手爾業七字)	杵屋栄二復曲/昭和30							12-6
152	なりひらこまち	業平小町(六歌仙容彩)	10杵屋六左衛門/天保2	5	3-4					3-4
153	なんこう	楠公	13杵屋六左衛門/明治35	4		7-5				
154	にわかかしまおどり	俄鹿島踊(四季詠寄三六字)	1杵屋勝五郎/文化10					114		
155	にわかじし	俄獅子	4杵屋六三郎/天保5							9-3
156	ねこのつま	めりやす 猫のつま	杵屋作十郎/明和1		2-2					2-2
157	ねやのしおり	唄浄るり 関の葉	杵屋六三郎カ/明治7							10-9
158	のきすだれ	軒簾	杵屋彌十郎/明治年間			6-1				6-1
159	のきばのまつ	軒端松	2杵屋勝三郎/弘化2					81		
160	のりよりみちゆき	範頼道行(道行花の雪吹)	1杵屋佐吉/安永10							9-2
161	はしべんけい	橋弁慶(遅桜手爾業七字)	杵屋栄二復曲/昭和30							12-8
162	はしべんけい	橋弁慶	大薩摩絃太夫/文久2	39		6-2				6-2
163	はつしぐれ	初しぐれ	10杵屋六左衛門/天保10	8		7-4				
164	はつねのひ	初子の日	4杵屋六三郎/天保4	37		5-4				5-4
165	はなかつみ	花かつみ	3杵屋栄蔵/昭和26(瀧美清太郎作詞)			4-8				4-8
166	はなぐるまいわいおうぎ	花車岩井扇	1杵屋正次郎/寛政4						119	10-2
167	はなじあい	花試合 鐘踊	5杵屋勘五郎/大正年間					99		
168	はなのとも	花の友	杵屋三五郎/天保年間		2-7					11-7
169	ばばさきおどり	馬場先踊	不明							10-1
170	はままつかぜこのよみうた	浜松風恋歌	9杵屋六左衛門/文化5			5-3				5-3
171	はるあき	春秋	5杵屋勘五郎/明治36	46		4-2				4-2
172	はるかぜ	春風(門松)	12杵屋六左衛門カ/明治1						123	
173	はるさめがさ	春雨傘	12杵屋六左衛門/明治30	7						13-10
174	はるのいろ	端唄 春の色	4杵屋六三郎/弘化2						122	
175	はるのしらべ	春の調	2杵屋勝三郎/慶應1	11						
176	はるのしらべむすめななくさ	春調娘七種	2杵屋六三郎/明和4			8-6				

②=『栄二三絃譜』 ③=『長唄三絃譜』 ④=『杵栄稽古本』 ⑤=『杵栄譜本』 ⑥=『栄二譜本』 ⑦=『栄二・三絃譜』

番号	所蔵機関			刊記	備考
	東文研	国立	国会		
118	④			④1971/02/**.	④譜本名称「杵栄けいこ本」
119	⑦		⑦	①1934/10/20発行。	
120	⑥			⑥1977/03/**.	
121		⑦	⑦	①1936/08/08発行。	
122	⑦	③⑤	⑦	⑤1974/07/**.	
123					
124		⑤		⑤1974/10/**.	⑤正本の所在と歌詞の訂正に関する覚書あり。
125		⑤⑦	⑦	⑤1974/12/**.	⑤正本連名あり。
126	⑦		⑦		③昭和33年7月節改訂。
127				①1930/01/25発行。	①昭和16年の既刊目次では第52編(「禿」と合本)となっている。
128		⑤		⑤1972/03/**.	
129	⑥	⑥⑦	⑦	⑥1976/07/**.	
130		⑦	⑦	①1940/03/07発行。	
131		⑦	⑦	①1933/07/11発行。	
132	⑥			⑥1976/06/**.	⑥正本連名あり。
133		⑦	⑦	①1932/01/01発行。	①譜本は2種類あり。②⑦上調子は開曲時に栄二作曲→消滅、昭和16年6月編曲、昭和25年7月一部改曲。
134	⑤	⑤		⑤1975/04/**.	⑤《玉藻前》は2曲あり現存曲は10杵屋六左衛門作曲のこの曲であることが記されている。
135	⑦	⑦	⑦	①不明。	①資料未確認。既刊目次による。
136		⑤		⑤1974/11/**.	⑤正本連名あり。
137				⑤1973/09/**.	
138		⑤		⑤1973/07/**.	
139	④	⑤		④1971/06/**. ⑤1969/06/**. 1975/03/**再版。	④譜本番号の「74」は「75」の誤植。
140		⑤		⑤1969/06/**. 1974/02/**再版。	
141		⑤		⑤1969/08/**. 1974/01/**再版。	
142				①1941/05/05発行。	
143	⑦	⑦	⑦	①1936/03/28発行。	
144				1968/05/**	
145		⑦	⑦		⑦第16回芸術祭主催公演創作長唄(昭和36年11月30日、東京都文化会館)。
146		⑦	⑦		
147		⑤		⑤1975/01/**.	
148	④	⑦	⑦	④1969/06/**.	
149	⑦	⑦	⑦		
150		⑤		⑤1971/12/**.	
151	⑦	⑦	⑦		⑦《越後獅子》へのツナギの合方の譜あり(昭和42年11月坂東三津五郎所演時)。
152		⑦	⑦	①1931/05/05発行。	
153				①1930/10/26、1931/05/05発行、1940/03/**再版	①譜本は2種類あり。
154	⑤	⑤		⑤1975/06/**.	⑤正本連名あり。
155		⑦	⑦		
156		⑦	⑦		
157		⑦	⑦		⑦連名あり。「版本連名の立三絃に杵屋六三郎とあれど作曲者なるか不明」とある。
158	⑦		⑦		③⑦替手：栄二補曲。
159	⑤	⑤		⑤1972/02/**.	
160		⑦	⑦		⑦初演時の情報を記載。
161	⑦	⑦	⑦		⑦復曲初演時の段切の譜あり。
162	⑦		①⑦	①1937/09/26発行。	
163				①1932/10/03発行。	
164	⑦	③	①⑦	①1937/05/31発行。	
165		⑦	⑦		③⑦坂東流舞踊曲。坂東会大会(昭和26年9月28日歌舞伎座)に開曲。
166	⑥	⑥⑦	⑦	⑥1976/10/**.	⑥正本連名あり。
167		⑤		⑤1973/11/**.	⑤明治末か大正初期帝國劇場女優主演の所作。大正初期に杵屋五三郎氏より教え受く。
168		⑦	⑦		
169		⑦	⑦		⑦志賀山流に残る若衆歌舞伎時代の曲。
170	⑦	③	⑦		
171		⑦	⑦	①1939/03/24発行。	
172	⑥			⑥1977/01/**.	⑥12杵屋六左衛門から伝授をうけた壺田喜千治より教わる。
173	⑦	⑦	⑦	①1932/01/01発行。	
174	⑥	⑥		⑥1977/01/**.	⑥正本連名あり。
175				①1933/12/04発行。	
176					

①=『三絃譜附長唄稽古本』

番号	曲名よみ	譜本曲名	作者者/作曲年代(作詞者等)	譜本名称・譜本番号						
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
177	はんだいなり	半田稲荷(四季詠寄三六字)	1杵屋勝五郎/文化10					112		
178	ひとりわんきゅう	一人椀久	不明					90		13-2
179	ひなづるさんばそう	雛鶴三番叟	不明/(宝暦5)	47		5-1				5-1
180	ひょうたんなます	瓢箪鮫(拙筆力七以呂波)	10杵屋六左衛門/文政11	24		8-3				
181	ふどう	唄浄るり 不動	4杵屋六三郎/文政4					98		
182	ほうらい	蓬萊	4杵屋六三郎/不明	1, 2						
183	ほたるがり	蛍狩	杵屋栄二/昭和30(竹柴蟹助作詞)			5-10				5-10
184	まいおうぎそのおのうめ	舞扇園生梅	2杵屋正次郎/文化3			8-8		101		
185	まくらじどう	枕慈童	5杵屋三郎助/万延2					102		
186	まつ	松	3杵屋栄蔵/昭和16(佐佐木信綱作詞)	(55)	1-10					1-9
187	まつのおきな	松の翁(園中松樹調)	3杵屋正治郎/明治10		3-7					11-5
188	まつのみどり	松のみどり	杵屋六翁/天保年間	21			21			
189	みつのことぶき	三つの寿	杵屋栄二/昭和27(渥美清太郎作詞)			7-10				
190	みめより	美面より	2杵屋正次郎/文化6						57	
191	みやこどり	都鳥	2杵屋勝三郎/安政2	43						11-9
192	みるつき	見月(月五首)	11杵屋六左衛門/元治1			7-8				
193	むつのはなさくらのふること	六花桜故事(六つの花)	杵屋彌十郎/慶應1					116		
194	むらさき	大薩摩 紫	3杵屋栄蔵/明治41(山岸荷葉作詞)				53			11-6
195	やりやっこ	鎗奴	不明			8-9				
196	ゆかりのつき	ゆかりの月	9杵屋六左衛門/文政9	1	1-3					1-3
197	ゆきじょうろう	雪女郎	3杵屋栄蔵/昭和2(木村富子作詞)			7-7				
198	ゆたかのはる	豊の春	杵屋六之助/弘化2	1, 6	2-3					2-3
199	ようきひ	楊貴妃	杵屋栄二/昭和30(吉井勇作詞)			4-10				4-10
200	よこぶえ	横笛	3杵屋正治郎/明治中期					105		
201	よしのてんにん	吉野天人	1杵屋六翁/天保14							14-2
202	よるのつるつなでぐるま	夜鶴綱手車	富士田吉治・錦屋惣治/明和2		3-8			115		3-7
203	らしょうもんのだん	羅生門之段	大薩摩浄空/慶應2				67			
204	らんぎくのこちょう	乱菊の胡蝶(やしき娘)	杵屋三五郎/天保10					92		
205	らんぎくまくらじどう	乱菊枕慈童(菊慈童)	杵屋忠次郎/宝暦7				66	66		
206	りっしゅんのまめうち	立春豆打(七重咲浪花土産)	10杵屋六左衛門/弘化3	21			21			14-6
207	りょうし	漁師(辻花七化粧)	2杵屋勝五郎/天保3		2-5			94		2-5
208	るりのつや	めりやす 瑠璃の艶	不明			7-1				
209	れんじし	連獅子	不明	(53)						
210	わかなつみ	若菜摘(花■十二月所作)	2杵屋勝五郎/天保11							10-4

②=『栄二三絃譜』 ③=『長唄三絃譜』 ④=『杵栄稽古本』 ⑤=『杵栄譜本』 ⑥=『栄二譜本』 ⑦=『栄二・三絃譜』

番号	所蔵機関			刊記	備考
	東文研	国立	国会		
177	⑤	⑤		⑤1975/04/**。	⑤文化10年3月中村座坂東三津五郎十二月所作事の一覧あり。
178	⑤⑦	⑤⑦	⑦	⑤1973/01/**。	⑦「某唄本(活字本)に安永元年とあれど何によりたるものなるか」とある。
179	⑦	③	⑦	①1939/03/24発行。	
180				①1934/12/13発行。	
181		⑤		⑤1973/09/**。	⑤正本連名あり。
182				①1929/10/15発行、1930/01/25発行、1940/03/28再版。	①譜本は3種類あり。1929年の発行では第1編、1930年発行、1940年再版では第2編。
183	⑦	③	⑦		③⑦昭和30年4月坂東三津加寿の依頼により舞踊地として作曲。
184	⑤	⑤		⑤1974/02/**。	⑤正本連名あり。
185		⑤		⑤1974/03/**。	
186		⑦	⑦	①不明。	①資料未確認。既刊目次による。②⑦「藤間勘右衛門派の名取試験用の曲として作曲されしもの」
187		⑦	⑦		②⑦3杵屋正治郎の作曲の経緯について記載。
188	④			①1934/10/20発行、1938/05/17再版。④1970/03/**再版。	④1934/10/**オフセット初版。
189					③昭和27年11月28日新橋演舞場。坂東三津加舞踊会。
190	⑥			⑥1976/05/**再版。	⑥「栄二譜本」とある(譜本番号としては「杵栄譜本」の範囲)。正本連名あり。
191		⑦	⑦	①1938/09/29発行。	
192					③10杵屋六左衛門七回忌追善曲。《見月》の演奏者連名。
193	⑤	⑤		⑤1975/06/**。	⑤正本連名あり。
194	④	⑦	⑦	④1968/07/26。	④⑦3杵屋栄蔵の処女作(醤油に関する宣伝の曲という)。作詞者山岸荷葉は尾崎紅葉門下。
195					
196		⑦	⑦	①1929/10/15発行。	
197					
198		⑦	⑦	①第1編：1929/10/15発行。第6編：1931/08/08発行。	①譜本は2種類あり。②作曲者：「杵屋六翁(六之助トモイウ)」。⑦作曲者：「杵屋六之助」。
199		⑦	⑦		
200		⑤		1974/08/**。	
201		⑦	⑦		
202	⑤	⑤⑦	⑦	⑤1975/06/**。	⑤正本連名あり。
203	④			④1970/06/**。	
204		⑤		⑤1973/02/**。	⑤大正初年に藤間勘寿郎(市川米蔵)の妻より習う。
205	④⑤			④1970/05/**。⑤1970/05/**。1975/06/**再版。	④表紙に「訂」とある。
206	④	⑦	⑦	①1934/10/20発行、1938/05/17再版。④1970/03/**再版。	①譜本は2種類あり。④1934/10/**オフセット初版。
207		⑤⑦	⑦	⑤1973/05/**。	②作曲者名は2杵屋勝三郎。「お前は沖の～おもしろや」は廃曲を4杵屋勝太郎が復元。
208					
209				①不明。	①資料未確認。既刊目次による。
210		⑦	⑦		譜本曲名の■は「兄」と「弟」の合字。

A Study of “Eiji-fu”: Scores of Japanese Music Transcribed by KINEYA Eiji

HOSHINO Atsuko

Nagauta shamisen performer, KINEYA Eiji (1894-1979) was not only active as an accompanist of *kabuki* performed by famous players but is also well known for his devoted study of repertoires of *nagauta* of which there were not so many transmitters or which were not popularly performed.

In this paper, a report is made of the scores transcribed by KINEYA Eiji, placing focus on the distinguished services that he provided to the transmission of *nagauta*. Eiji started to transcribe scores when he faithfully recorded the repertoires that he learned from his master, KINEYA Eizo III so that he would not forget them. He then learned rarely performed repertoires from *nagauta* performers of other schools and wrote them down. He eventually employed his own notation to transcribe the results of his studies into scores. Although scores of Japanese music are often expressed with numbers, Eiji used three types of *kana* letters, and the scores that he wrote are generally called “Eiji-fu.” From around 1929, Eiji began to publish the scores in earnest, first under the supervision of KINEYA Eizo III. Of the “Eiji-fu” published, the present author has confirmed 7 types of scores, totaling 210 repertoires.

Eiji was designated Holder of Important Intangible Cultural Property in 1964 for his performance and studies. Using the subsidy he received, Eiji published *Eiji fuhon* and what may be called a comprehensive study of his works, *Eiji sangen-fu*.

In the present study, Eiji’s personal history and the results of his studies of *nagauta* are examined, based on articles of interview with Eiji and the recollections of his fellow performers. The rules that he used in notating “Eiji-fu” and the circumstances surrounding publication are also analyzed. A list of the scores of 210 repertoires is attached at the end.